

## 2000（平成12）年度 東京大学 入試問題 第1問 解答例

一 自然においては価値や目的が含まれず、人間もその一部分であり、人為を含む一切が因果的・機械論的に把握されるということ。

\* 「すべての事情」が「自然的である」とは、「人間的なAI」が「人間的＝人間らしい性質を有している」ことであるように、「人間を含むあらゆる状態・段階において」、この文章における「自然」の性格を示しているということである。すなわち、「一切の事柄は因果的・機械的である」ということ。

二 広義の自然自体は価値や目的を含まず、人為的改変の程度に応じた価値評価により、自然保護は実質的意味を得るということ。

\* 「人間との関連づけ」には、色々なレベルがありうる。傍線部直前の「人為が加えられて人間が生存しやすくなった自然」では、傍線部の同義置換とは言えない。「人間との関連づけによって・守るべき価値を与えられる」＝「人為による改変をどれだけ受けているかによって・自然の価値評価をする」のであるから、「人間が生存しやすくなった自然」は、改変ゼロ（人跡未踏の原野や原生林）～改変100%のうちの、「実際に人間に好都合な例」であるにすぎない。現実にとどのような自然に「守るべき価値」が与えられているかという問題と、理論上自然に守るべき価値が与えられるための条件とを混同しないこと。

三 動物個体の生命の尊重は、弱肉強食を主体とする食物連鎖に反し、生態系の安定と平衡が成立せず、種の存続が困難になるから。

四 生態系は定義上、すべて等しく無価値とする自然とは異なり、生態系の安定と生物種の多様性を望ましいとするということ。

\* 筆者が「妥当であろうか」と批判する、「生態系」の「ごく単純」な定義（常識的定義）などから解答を導出するのではない。問われているのは「概念の内容」であり、土壌だの気象条件だの物理的事象を指すわけがない。難問であるゆえんは、「機械論的に把握された自然の概念よりも豊かな内容が含まれている」にもかかわらず、その「豊かな内容」が「価値があるということを必ずしも含意ない」点にある。よって、解答に「価値があるということ」とすれば、完全な誤りである。「豊かな内容」とは、直後の「安定」と「多様性」であり、それらが「守るべき価値とまでは言えない」のである。

五 環境保護の意味は自明ではなく、自然、生態系、環境の概念もニュアンスが異なる。したがって、人類の生存を可能にする地球環境条件を守るためであるという利己的な動機づけを自覚し、環境保護に実質的意味を与え、実践の努力を適切なものとするべきであるから。(一二〇字)

\* 「論旨をふまえて」という定番の条件に対応して、本文の第1・第2段落に着眼できたかどうかのポイントとなる。本文全体の論旨とは、「自然・生態系・環境」のいずれの「概念」を分析しても、それらから必然的に「守るべき価値」を導くことはできないということである。「なぜ、自然や生態系や環境を保全しないといけないのか？」という問いに、「地球にやさしく」とか「他の生物種のために」といった解答では、「守るべき正当な根拠」にならない。本文の帰結は、自然や生態系や地球環境の保全などは、「人類の生存のためという、人類の利己主義である」ということである。

\* 設問五は、上記の「人類の利己主義」について、なぜ「そのことの自覚がまず必要である」のかと、「利己主義を自覚する必要性」の根拠を問うている。これについては、本文では直接的な言及がないので、単なる「本文内容の理解（本文解釈）」などによって導こうとしても、無意味である。かといって、「背景知識」「教養」の類とみなすのは論外であろう。「この本文の主張についての知識」が「現代文の学力」として大学入試でテストされているのだとは、まさか誰も考えまい。とすれば、この設問の「解答」は、本文から論理的かつ抽象的に導くしかない。したがって、難問である。繰り返すが、解答導出のポイントは第1・2段落にある。「このような問題においては、何を意味するのかの微妙な違いが、実践上の重大な差異になりうるから」である。では、どんな「重大な差異」が「実践上」生じるのか。それには本文の範囲内に言及がないのである。

\* 経済的活動に由来する「環境破壊」に対して、「地球にやさしくない!」「絶滅危惧種の生存権を侵している」と主張しても、当該の経済活動（リゾート開発など）を差し止めるための実効性を欠くであろう。本文によれば、「守るべき内在的な価値」のないような対象について、「かわいそうだから守れ」といって訴訟を起こしても、開発工事の仮差し止めすらできない。しかし、「人類の利己主義」すなわち、「その開発は、他人の生存や生活を脅かす」とすれば、十分な「訴訟事由」となる。すなわち、「人類の利己主義であることの自覚」があつてこそ、「実践上の重大な」（第1段落）意義をもって、環境保全活動が行えることになるのである。煽情的な利他的ニュアンスのスローガンには実効性がないということである。ちなみに、本文では「利他的な偽善はけしからん、不道德だ」などという陳腐なことも、述べられてはいない。

六 a 微妙 b 局地 c 脅 d 維持 e 犠牲